

古典語を学んでみて

近藤 一彦

1. 古典語とは

古典という言葉は英語では classics と言いますが、この classics は古代ギリシャおよびローマの代表的著述を意味します。従って classical language といえば古典ギリシャ語およびラテン語のことを指すようです。しかし、日本語の古典は必ずしもギリシャ、ローマの著述だけを意味するわけではなく、広く中国やインドなどの古い著述も含めて言われることが多いようです。そこで、日本では古代ギリシャ、ローマの著述は西洋古典と言いつらられています。学会も西洋古典学会となっています。

これに対応する東洋古典という言い方はあまり使われることが少ないように思います。日本で古典といえば漢文で書かれた著述が昔から馴染みが深いわけで、インドの古い著述については、そのほとんどが漢訳を通じて日本に入ってきていたために、サンスクリットやパーリ語といった原語でその著述が読まれるようになったのは明治以降のことのようです。

私も西洋古典には若い頃から親しんできましたが、インドの古典についてはほとんど知りませんでした。古典ギリシャ語とラテン語を習いはじめて、ギリシャ語とサンスクリットが同じ印欧語に属することを知り、サンスクリット、パーリ語といった言葉とそれで書かれた著述に興味をもち勉強をはじめました。従って、私が「古典語を学んでみて」と言うときの古典語は古典ギリシャ語、ラテン語、サンスクリット、パーリ語の四つを意味しています。

この四つの言葉のうち、今でも会話で使われているのはラテン語とサンスクリットだけです。特にサンスクリットは、インドの国勢調査で日常の使用原語としてサンスクリットと書く人が数千万いるということですから、今でも生きている言葉といえるでしょう。

これにひきかえ、古典ギリシャ語は口語としては完全な死語で、これで書かれた著述を読むためだけの文語と言えます。パーリ語はもともと原始仏典を書き記すための言葉であって、口語としては使われなかったようです。

これら四つの古典語で使われる文字は、ギリシャ語はアルファ、ベータ、ガンマといういわゆるギリシャ文字、ラテン語は私達が日常使っているローマ字です。サンスクリットは現在インドで使われているデーバナーガリ、パーリ語には固有の文字はなく、インドではデーバナーガリ、スリランカではシンハラ文字、タイではタイ文字というよう

に、それぞれの土地の文字が使われています。

これらの言葉の文字に共通する点はいずれも表音文字ということです。従ってサンسكريットにしるパーリ語にしる、我々はローマ字で書かれたテキストで読むことができますから、これらの言葉を学習するうえで、文字を覚えるのが大変だという心配はあまりありません。

2. 何故古典語を学んだのか

(1) 西洋古典との最初の出会

私は昭和 34 年に大学を卒業して清水建設に入社し、福岡にある九州支店に配属されました。最初 2 年間は内勤にいて、その後現場に出ました。当時の日本はまだ貧しく、高い学力がありながら家の事情で大学に行けない人が沢山いました。

現場にもそういう人が沢山いて、この人たちは本当に優秀で、仕事もよくできました。建設に限らず、当時の日本の生産現場はこのような人たちによって支えられていたと言っても過言ではないでしょう。

昭和 37 年の暑いさかりに、現場の若いエンジニアの一人が私のところにやってきて、「九大で社会人のための開放講座が開かれる、私のほか数名の者がこれを受講したいといっている、ついては近藤さん我々を引率して連れて行ってくれないか」ということを言ってきました。向学心があってよい、ということで現場の工事長も是非参加しろ、というのでこれに出席することになりました。

九州大学解放講座—ヒューマニズム研究—というこの試みは文学部の若い助教授達が中心になって企画されたもので、いまでこそ、このような社会人を対象とした講座は珍しくもありませんが、当時としては画期的な企画でした。藤沢令夫（後に京大教授）、今道友信（後に東大教授）といった新進気鋭の若い学者が講師として名を連ねていました。

昭和 37 年 9 月から翌年の 3 月までの 6 カ月間、月、水、金の週 3 回、18 時から 21 時までの 3 時間、という大変ハードなスケジュールが組まれていました。九大の大講義室に集まっていたのは 400 人近い若者たちでした。今、このような催しが行われたとしたら、おそらく参加者の大部分は高齢者であって、若者の参加者は少ないのではないのでしょうか。50 年という歳月が日本社会にもたらした変化の大きさを感ぜずにはいられません。

この開放講座によってはじめて西洋古典の思想、歴史、文学などに会い、大きな感銘を受けました。二千数百年前に、人々は既に我々と変わらない、いや、それを遥かに凌ぐ考えを持ち、日常生活の感情の機微まで細やかに表現する文学作品を残していることに驚きました。

(2) 田中美知太郎の著作を通じての西洋古典

このとき以来、ギリシャとかローマとかいう表題のついた本をみると、気になって読むようになりました。とりわけ田中美知太郎先生の本をよく読んだとおもいます。田中先生は当時京都大学でギリシャ哲学を教えておられました。大学の先生、特に古典を専門にされる方は、とかく象牙の塔に引きこもりがちで、一般読者向けの本を書くというようなことも少なかったように思います。しかし、田中先生は専門の西洋古典の分野にとどまらず、政治、社会など時事問題についても積極的に新聞や雑誌で意見を述べられていました。

それらはいずれも目前の問題を風評に流されることなく、古典によって身につけられた教養にもとづき、普遍的価値基準によって、問題の本質と解決の方向を示される、というのが特徴であったように思います。

こうして、いわば、田中先生にかぶれてしまったわけですが、田中先生の本の中に出てくるプラトンやツキディデスなどの引用を読むうちに、やはり、原典そのものを読む必要があると思うようになり、翻訳を読むようになりました。ホメロス、ヘロドトス、ツキディデス、カエサル、キケロと手当たり次第読んでいたわけです。

(3) 古典ギリシャ語独習と挫折

ある時、プラトンを本格的に読んでみようと思い、神保町に行って角川版のプラトン全集を買ってきて読み始めました。ところが、日本語になってはいるのですが、意味がまったくとれませんでした。内容が難しいというよりも、日本語として理解できなかった、と言った方がよいでしょう。

途方にくれて、また神保町に行き、今度は岩波書店版の全集を買ってきて読み始めると、これはよく理解できました。この経験から、翻訳というものに若干の疑問を持つようになりました。

外国語を翻訳するためには、翻訳者は三つの知識が必要であるように思います。一つには、翻訳する外国語の文法知識、二つ目は外国語で書かれている内容、時間も場所も遠く離れた事柄を理解していること、そして、三番目にそれらの事柄が現在の日本でどのような言葉で言われているかという知識です。

従って、我々が翻訳で外国語の作品を読むときには、翻訳者の主観にかなり大きな影響をうけることになる。もし、そのような他人の主観の影響を受けることなく、原作者の生の考えを知りたいと思えば、自分で原語のテキストを読むしかないのではないかと、思うようになり、ギリシャ語の勉強を始めたのですが、敢え無く挫折してしまいました。

当時、私は横須賀線の逗子に住んでいました。当時の多くの方がそうであったように私も完全な仕事人間で、朝 6 時半に家を出て、帰るのは早いときでも 10 時頃、遅くな

れば午前様、という生活で、読書の時間は往復2時間の車中。ギリシャ語の文法書を買ってきて読み始めてみたものの、すぐにこれはとても手に負えないということが分かりました。そして、これに本格的に取り組むのは、定年退職によって仕事人間をやめる時まで待たなければなりませんでした。

3. 古典語の学習

(1) ギリシャ語、ラテン語の学習

平成13年6月末に退職すると、翌日、7月1日に横浜の朝日カルチャーセンターに行きギリシャ語とラテン語の入門クラスに申し込み、その日からクラスに参加しました。毎週金曜日の18時10分から17時30分までがギリシャ語、17時40分から21時までがラテン語という時間割でした。

授業の進め方は、文法書の1章毎に、まず先生が説明し、和訳と作文の練習問題を生徒が答えるというやりかたでした。翌年3月に入門クラスは終了し、また4月から新たに入門クラスが始まる、ということで、朝日カルチャー横浜にはまだ講読のクラスはありませんでした。

しかし、朝日カルチャー東京には講読クラスがありましたので、結局週二回新宿まで出かけて行って、ギリシャ語二つ、ラテン語一つのクラスに参加することになりました。最初はギリシャ語中級、ラテン語中級の2クラスに出るつもりでしたが、上級クラスの案内をみたところ、入門修了者はだれでも参加できる、と書いてあったのに釣られて出てみることにしたのです。上級クラスではソフォクレスの悲劇オイディプス王を読んでいた。これはとびきり難しくて、初心者に手がでるようなものではありませんでしたが、ずうずうしくも出席して、担当を割り当てられると、たどたどしく発表していました。先輩たちは英語版の大辞典や参考書の説明を引用しながら見事な発表をしていました。私も同じ辞典や参考書を買ってきて、同じような発表をしようと必死でしたが、初心者の悲しさ、いつも間違えてばかりで恥じをかいていました。

しかし、後になって振り返ってみると、このときが一番進歩したように思います。人間、すらすら答えの出来たところはすぐに忘れてしまいますが、間違えて恥ずかしい思いをしたところは決して忘れません。そこで、後からクラスに入ってきた後輩たちには、思ったことは躊躇せずに発言しなさい、間違っただけ、それだけ進歩するのですから、とアドバイスすることになっています。

新宿では「オイディプス王」のほかプラトンの「饗宴」「ソクラテスの弁明」、ホメロスの「イリアス1歌、22歌」、ラテン語はスエトニウスの「皇帝伝」、キケロの「老年について」などを読みました。

その後、朝日カルチャー横浜でも講読のクラスができたのを機に、新宿をやめて横浜のクラスに出ることにしました。以来、現在に至るまで、多いときは週4クラスに出席

して、多くの作品を読んできました。今、読んでいるものを含めて、横浜ではヘロドトスとツキディデスの「歴史」、プラトンの「クリトン」、「新約聖書」、「イソップ寓話」、エウリピデスの悲劇「メーデイア」、クセノフォーンの「ソクラテスの弁明」、リュシアスの「葬送演説」などのギリシャの作品、ラテン語ではカエサルの「ガリア戦記」、テレンティウスのローマ喜劇「兄弟」を読みました。

授業が終わった後で、生徒の仲間と講師とでジョッキを傾けながら議論を戦わせるのも古典語を勉強することの楽しみの一つになっています。

(2) サンスクリット語、パーリ語の学習

横浜のギリシャ語、ラテン語の教室の仲間の中にギリシャ語、ラテン語の他にサンスクリットを学んでいる人が何人かいました。その人たちの話により、サンスクリットがギリシャ語と同じ印欧語であり、文法的にもよく似ていることを知り、にわかにサンスクリットに対する興味が湧いてきました。それまで、東洋の古典といえば、漢文により中国の古典について若干の知識はあったものの、インドの古典についてはほとんど接する機会がありませんでした。しかし、仏典やインド哲学と言われるものについて漠然と想像していたことは、それはギリシャ哲学とは全く違ったものだろうということでした。それだけに、ギリシャ語とサンスクリットがほぼ同じ言葉だと言われて、奇異に感じたのです。

人間はものを考えるときに何によって考えるかと言えば、言語によって考えています。従って個々の言語の持つ特質は、それによって考えられる思想にも大きな影響を及ぼすものだと考えていました。しかし、同じ印欧語を使っていながら、方や徹底した論理の上に組み立てられた思想、方や茫洋としたインドの思想—インドの思想の何たるかも知らずに、ただ漠然とそのように想像していただけのことなのですが—があることに疑問を感じ、その原因を探ってみたいという好奇心から、サンスクリットを勉強することにしたのです。

東京神田の神田明神前に東方学院という小さな学校があります。中村 元先生が個人財産を出して作ったインド学に関する現代の寺子屋と言われる粗末な学校ですが、講師は一流です。そこで、サンスクリットとパーリの文法を習い、購読を始めたわけです。ここでちょっと印欧語とサンスクリット、パーリ語の関係についてお話しておきます。古代印欧語のもとになったと思われる印欧祖語と言われる、今ではすでに失われてしまった言葉は黒海のほとりに住んでいた民族が使っていたと言われていています。この民族が西に移動してギリシャ語、ラテン語から現代の印欧近代語になり、東に移動して古代ペルシャ語、サンスクリット、パーリ語などの言語のもとになったと考えられています。

パーリ語で東西南北を表す言葉は、東は para で、この言葉は本来の意味は「前」を表わします。西を表す pacchima は本来「後方」、南を表す dakkhina は「右」、北を表す uttara は「上」を表す言葉です。このことが印欧祖語を話していた民族が東へ移動して

きてインドに至り、土着の民族を征服し印欧語をこの地にもたらした証拠であるのだそうです。北が左ではなく上になっているのは、北にはヒマラヤが聳えていたからだ、ということのようです。

古代のギリシャ語はポリスの数だけ方言がある、と言われるほど多くの方言に分かれています。インドで話されている印欧語も多くの方言に分かれています。これらの方言のことをプラクリットと総称します。サンスクリットでは prakrita といいます。これは日常の、普通のという意味です。しかし紀元前 400~500 年ごろ、パーニニという文法学者が標準語としてまとめたのがサンスクリットで、これ以降あらゆるジャンルの作品がサンスクリットを使って書かれるようになります。因みに、サンスクリット (samskṛita) は洗練された、浄化された、という意味を持っています。ブッダの教えを書き記したものとしての原始仏典を書くのに使われているパーリ語は、このプラクリットの一つです。

東方学園ではまずサンスクリットの文法を学んだのち「ビクラマ王の冒険」という物語を読みました。その後、同じ東方学園でパーリ語の 3 日間の集中講義で文法をを学んだ後、「ミリンダ王の問い」という原始仏典の一つを講読しました。この作品は日本語訳の副題に「インドとギリシャの対立」とあるように、ミリンダ王というギリシャ人の王様とナーガセーナという仏教の高僧が哲学上の諸問題について対話する、という筋書きで、興味深いものでした。

4. 古典語を学んでみて

以上、ギリシャ語、ラテン語、サンスクリット、パーリ語という四つの古典語を学んだ様子をお話ししてきましたが、最後に、これらの古典語を学んで感じたことをお話ししてみたいと思います。

(1) 屈折語としての印欧語の難しさ

私が学んだ四つの古典語はいずれも屈折語の中の印欧語という言葉に属しています。屈折語は文章を構成する各単語の語尾を変化させることにより、文章の中での各単語の役割を確定する言葉です。これに対し、日本語が属する膠着語では、各単語の語尾は変化させずに、単語と単語とを助詞という糊でくっ付けることにより、文章の意味を明らかにする言葉です。

簡単な例をあげますと、

カエサル (は) ユリア (に) 本 (を) 与える

という日本語をラテン語に訳しますと

Caesar Juliae librum dat.

となります。日本語では助詞の（は）（が）が付いている単語が主語であり、（に）が付いていれば間接目的語、（を）が付いたものは直接目的語になります。しかし、ラテン語では助詞がない代わりに格というものがあって、主語になる単語は主格、間接目的語は与格、直接目的語は対格というようにそれぞれ異なった語尾をしており、語尾の形を見ただけで、単語の役割が分かるようになっているのです。上の文例で言えば、caesar は主格、Juliae は Julia という単語の与格で間接目的語、librum は liber（本）という単語の対格で直接目的語を表しています。

古典印欧語の名詞、代名詞、形容詞がどのような格をもつのかは参考資料—1のとおりです。このように語尾変化によって単語の役割が決まっているために、古典語では単語の語順は自由自在で、語順を変えても意味は変わりません。上の文例で言うと、

Juliae dat librum Caesar

としても、意味は同じです。実際に古典語の原典を読むと語順がバラバラで、英語に馴染んできた者には大変理解が難しく、最初は戸惑います。

動詞は名詞、形容詞以上に複雑な語尾変化をします。参考資料—2に変化の基準を示してありますが、ギリシャ語では理論的には一つの動詞が900通り以上変化することになります。

古典の原文にはこのようにさまざまに変化した形の単語が並んでいるわけですが、辞書の見出し語はその中の一つの形しか出ていません。ギリシャ語、ラテン語の場合、名詞、形容詞では男性・単数・主格が、動詞では直接法・能動相・現在・一人称・単数の形が見出し語になっていますから、文中に見出し語以外の形が出てきた場合、その単語の見出し語がどんな形をしているのか分からないと辞書が引けません。私の場合、辞書をひけるようになるまで半年近くかかりました。このような語尾変化が多いということが古典語の勉強を難しくしている原因の一つで、40年前私が挫折した原因もここにありました。しかし、実際に始めてみると、「習うより慣れろ」で数を重ねていけば意外と簡単に覚えられるものです。

（2）古典から学ぶもの

さて、以上お話ししましたように試行錯誤を繰り返しながら、この10年間古典語を学んできたわけですが、これが定年後の暇つぶしに役立った以外に、何か私にもたらしたのだろうかと考えてみますと、そこに古典の持つ本質のようなものが見えてくるように思います。古典が我々に教えてくれるものは、時を経ても変わることのない人間の本性

であろうと思います。

いま、ギリシャ語の講読でツキディデスの歴史を読んでいます、その中に次のような一節があります。日本語訳で引用してみますと、

「わたしのこの書物には物語めいたことがないとすると、これを聞いても多分楽しめるところは少ないと感じられるであろう。しかしながら今ここで起こったことの確実なところは何であったかを見ようとする人が将来出てくるとして、」そのような場合にも、またこのようなことや、これに近いことは、それが人間の自然の性質に基づくものならば、将来もまたいつか再度起こるだろうから、そのような場合にも確実のところを見たいと思う人達が、この書物を有益だと判定してくれるなら、それで十分だろう」ということが言われ、そしてそのような人間の本性として「利欲心、功名心、恐怖心」が指摘されています。

今、世界のあちこちで起きていることを見るにつけ、不幸にもツキディデスの予測は当たっていたと言わざるをえません。古典を学ぶということは、変わる事のない人間の本性に基づく悲喜劇を昔の人はどう受け止め、どう対処してきたかを学び、自らの身を処すためのよすがとすることではないかと私は思っています。

ただ、残念なのは古典というと何か難しく、よほどの変わり者でないと手が出ないのではないかと思われていることです。

しかし、私が学んだ限り、古典の原文の多くは平易な、分かりやすい文章で書かれています。サンスクリットやパーリ語の文献を多く翻訳しておられる中村 元先生が言うておられることをちょっと引用しますと、

「わたくしが先年スッパニータ（邦訳名：ブツダのことば）を邦訳したとき、その訳文が聖典としての荘重さが無いという批判があった。しかし、聖典としての荘重さなるものは漢訳を用いたシナ・日本において教団としての権威が確立したのちに必要になったものであり・・・ただ人間の真理を端的に述べていただけである」とおっしゃっておられます。大般涅槃経という、とつき難くそうな題名の経典も、中村先生は「ブツダ最後の旅」という表題で訳しておられ、そしてこの本は線香の匂いのするお経というよりは中村先生のつけられた表題に、よりあった内容をもっているのです。

西洋古典についてもおなじようなことが言えます。プラトンの作品はほとんど対話形式で書かれており、そこで使われている言葉は日常の会話で使われている言葉です。田中先生は「どんな難しい哲学の考えでも、高校卒業程度の日本語の知識で理解できるように書かれるべきである」ということ言われていますが、古典の多くはこれに当てはまるものだと思います。

人類共通の遺産である古典を出来るだけ多くの人、特に若い人によんでもらいたいものだ、と思いながら、毎日辞書をひいています。最後に、私がこれまで読んできた古典の中から特に印象に残っている三人の偉人の言葉を御紹介して、私の話を終わりにした

いと思います。イエス、ソクラテス、ブッダが死の直前に語った言葉として書き記されているものです。これをどう受けとめるか、ということは人それぞれでしょう。

「人のまさに死せんとするや、その言うやよし」と言いますが、このような言葉に出会えるということも、古典を学ぶ楽しみの一つと言えるのではないのでしょうか。

(おわり)

イエス、ソクラテス、ブッダの最後の言葉

イエス：「 ελωι ελωι λεμα σαβαχθανι 」 (κατα Μαρκον § 15 – 33
Nestle-Aland:Novum Testamentum
Graece)

「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」
そばに居合わせた人々のうちには、これを聞いて「そら、エリヤを呼んでいる」という者がいた。ある者が走り寄り、海綿に酸いぶどう酒を含ませて葦の棒につけ「待て、エリヤが彼を下しに来るかどうか見ていよう」といいながらイエスに飲ませようとした。しかし、イエスは大声を出して息を引き取られた。

(新共同訳新約聖書：日本聖書協会)

ソクラテス：

「 ὦ Κρίτων, τῷ Ἀσκληπιῷ ὀφείλομεν ἀλεκτρούνα. ἀλλὰ ἀπόδοτε καὶ μὴ ἀμελήσητε.」 (Plato Phaedo:Cambridge Greek and Latin Classics)

「クリトン、アスクレピオスに鶏を一羽おそなえしなければならなかった。その責めを果たしてくれ。きっと忘れないように」「うん、たしかにそうしよう」とクリトンは言った。「しかし君、ほかになににか言うことはないか」こう彼はたずねたが、もう答えはありませんでした。

(「パイドンー魂についてー」松永雄二訳 プラトン全集1：岩波書店)

ブッダ：「Handa dani bhikkhave amantayami vo. Vayadhamma samkhara, appamadena sampadethati」 (Maha Parinibbana Suttanta:Diganikaya Vol II :Pali Text Society)

「さあ、修行者達よ、お前達に告げよう、「もろもろの事象は過ぎ去るものである。怠ることなく修行を完成させなさい」と。これが修行をつづけて来た者の最後の言葉であった。」(「ブッダ最後の旅ー大般涅槃経ー」中村 元訳 岩波文庫)